

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

野菜を育てる／学校法人あおい学園 あおい幼稚園（新潟県）

皆さんの園では、植栽活動が子どもたち主体の展開になるように、どのような環境の工夫をしていますか？
育てる場所、何を育てるかなど、地域や園の実態、子どもの興味・関心などに添って、様々な工夫がされていることと思います。今回は、野菜を育てる過程で、子どもたちが、植物の生長の喜びを感じながら、大事な野菜を自分たちで守ろうと、考えたり工夫したりして取り組む姿をご紹介します。



● 自分たちの野菜を育てよう～スイカ大作戦～／4歳児

✦ 苗との出会い：4月下旬

- 育ててみたい野菜、食べてみたい野菜などをクラスで話し合った。様々な意見が出て盛り上がった結果、スイカ・ミニトマト・キュウリ・カボチャの4種類の苗を植えることになった。話し合いで決まった苗を保育者が準備し、いつでも観察できるように、身近な場所に置いた。また、子どもたちの興味を捉えて、情報となるような絵本や図鑑を用意した。

子ども：「苗っていろいろあるんだね。何の野菜かな？」

子ども：「みんな葉っぱの形が違うね」

子ども：「スイカの葉っぱは、手の形に似ている」

子ども：「キュウリの葉っぱって、潰すとシャリシャリって音がするんだね」

子ども：「この葉っぱ、触ると匂いがする！これはトマトだ！」

子ども：「面白いねー」

- 触ったり見たりして、葉の形・匂い・手触りなどそれぞれの野菜の特徴や違いに気付く姿があった。



✦ 苗植え：5月上旬

- 園から歩いて5分程の農園に苗を植えた。保護者も自由参観として、一緒に畑作業をした。
- Dちゃんが、「大きくなーれ！」と言うと、2～3人の子どもたちが、「大きくなーれ、大きくなーれ！」と苗の応援が始まり、それが大きな輪となっていた。
- 農園が園から離れているため、子どもは毎日の観察ができない。そこで、保育者は毎朝、農園へ行き、苗の生長をカメラで記録した（カボチャやスイカの受粉にも気を配った）
- 子どもたちは交代で農園に行き、その度に、雑草取りや水やりをし、いろいろな苗に近付いてよく観察した。毎回新しい発見ができた。花や蔓の生長に気付いて、言葉で伝え合い喜び合い、感動体験を重ねていった。
- 雨続きなどで子どもたちが畑に行けない時でも、関心が途切れることないように保育者がカメラに撮って、野菜の生長を見せ、話題にした。



✦ スイカの実発見！：6月中旬

- スイカの小さな実ができた。みんなで農園へ行く。スイカの3つの苗から、子どもたちは、全部で8つの小さな実を発見した。
- 「かわいい」「毛が生えてる」「小さいけど、縞々がある」「まだ小さいけど食べてみたいなー」など、子どもたちは小さな実の発見を喜んでいました。
- スイカは日ごとに大きくなっていく。スイカの下に稲わらを敷いた（農家さんのアドバイスにより）。



✦ 大事なスイカを守ろう！：7月下旬

- この頃になって、いつものように保育者が朝の見回りに行くと大事件が起きていた。慌ててカメラ撮影し、園に帰って子どもたちに様子を知らせる。

子ども：「うわっ！穴が開いてる！」

子ども：「えー！誰が食べたの？」

子ども：「僕たちのスイカを！」

子ども：「鳥か虫が食べたのかな？」

子ども：「ちがうよ、アリじゃない？ナメクジじゃない？」

子ども：「食べられないようにしなくっちゃ！」

子ども：「守ってあげよう！」

子どもたち：「そうだね！」「大事なスイカを守ろう！」

保育者：「どうやってスイカを守ろうか？」

子どもたち：「作戦！作戦！」

- 子どもたちは何か話し合いをするたび「作戦会議」を開いているので、自発的に言葉が出てきた。しばらく考えたAちゃんが、「（ままごとのバケツを持って）これは？被せるの！」
- 「いいね！」「もっと持っていこう！」「スイカ、もっといっぱい畑になっていたからね」「ももさん（3歳児組）からも借りてこよう！スイカ大作戦だ！」など、Aちゃんのを考えを受けて、子どもたちは、思い思いの考えを伝え合う。
- 考えはすぐにまとまった。ナベ・バケツ・カゴなど園にあるものを、いろいろと他クラスからもかき集め、農園へ向かった。穴の開いたスイカを実際に目にして、再度びっくりした様子。
- 不安や心配を感じた子どもたちは、他にも穴の開いているスイカはないかと点検したが、他に傷はなかった。それぞれがスイカにナベやバケツなどを被せた。
- また、虫や鳥に向けて「あっち、行けー」と口々に話したり、手足を動かしたりしているうちに、ダンスのようになった。後に“あっち行けダンス”と命名された。



✦ スイカ大作戦実行：7月中旬

- 畑の帰り道、黒いヒラヒラを見つけた。その日には分からなかったが、家に帰って保護者に黒いヒラヒラが何かを聞いてきた子どもがいた。

Bちゃん：「よく分かったよ！黒いヒラヒラは、カラスをびっくりさせる仕掛けなんだって！」

子どもたち：「知らなかった！」「いいこと聞いたね」

Cちゃん：「私のお母さんもいいこと教えてくれたよ。カラスは、ピカピカした物をぶら下げて置くと、怖がって近寄らないんだって！」

- この話し合いにより、子どもたちの中ではスイカを食べたのはカラスかもしれないという考えに固まっていく。

Dちゃん：「僕のお母さんは、野菜が大きくなるためには“水とおひさまパワー”が大事って言ってたよ！」

- そこで、作戦をさらに考え合い、相談の結果、3つの作戦を実行することになった。
- 「僕たちが畑に行けないこともあるから、オバケに守ってもらおう！」と、カラービニールで作ったオバケで脅かそうというもの。スイカ畑のフェンスにぶら下げた。「オバケちゃん、よろしくね！」
- バケツでは苗の生長に必要な水や“おひさまパワー”の妨げになってしまうと分かり、カゴに変更する。「これでおひさまパワーももらえるね！」
- “あっち行けダンス”は、畑に行くと子どもたちから自然と声が上がるとお気に入りのダンスとなっている。参観日には、保護者の方も一緒に踊っていた。



✦ その後

夏休み明けの園では、スイカの実が収穫の時期を迎えた。カゴ作戦はうまくいった。「カゴを被せていたので、カラスにスイカを食べられなかった」と、子どもたちは喜んだ。

✦ 振り返って

- 生長を追うごとに、育てているものに対する愛着が強くなっている。実の生長を見る度に、イメージしているスイカの大きさに近付いていることを実感している。また、「“お世話しなくちゃ”という使命感」から、「育てる楽しみ」に変わってきたことが読み取れる。
- スイカの穴は子どもたちにも大事件だった。現場に足を運んだ子どもたちは、危機を目の当たりにして、スイカを守りたい一心で、守る対策として、様々なことを考えた。「スイカを守る」という目的に向かって友達と考え合って、実行する中で、子どもたちの気持ちはどんどんまとまっていった。
- 子どもたちの発想を大事にし、気持ちに添って野菜作りを進めてきた。スイカ事件では、子どもの心や気持ちが大きな原動力となり、考えを出し合い、うまくいかないことに出会っても、工夫・創造して乗り越える豊かな体験が、心の成長に繋がった。また、子どもたちが、様々な人や畑を取り巻く環境と関わることで、繋がりを感じる姿も見られた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」